

現代中国語の“要”と“会”が表す認識モダリティの差異

王 牧

要旨

本稿は、“要”と“会”が表す認識モダリティの意味機能の違いを考察したものである。考察の結果、“要”は直接経験に基づき、ある個別の事態の生起が差し迫っていることに対する判断を表し、“会”は論理的な推論に基づいた、ある事態の生起・存在の可能性に対する話し手の予測を表す傾向があるということが判明した。一般に、“要”が認識モダリティを表す際には、しばしば文末助詞“了”との共起、時に“的”の補助が必要となるのに対し、“会”は文末助詞“了”と共起できず、“的”の有無も“会”の認識モダリティの表出には影響を与えない。また、“会”が表す認識モダリティは「非現実性」を強く志向し、一方“要”は不如意の事態への判断を表す傾向があり、「警告」「威嚇」という語用論的な機能を果たすことも指摘した。

キーワード: “要”, “会”, 認識モダリティ, 推量, 証拠性

1. はじめに

認識モダリティ (epistemic modality) は命題の真偽に関する話し手の判断を表す。現代中国語の助動詞 (中国語では“能愿动词”と呼ぶ) の“要”と“会”は、その認識モダリティの一形式として、発話時点、もしくは参照時より未来に生起する事態が成立する可能性に対し、話し手の主観的な判断や推量を表すことができる。両者は同じ文脈でしばしば置き換えることも可能である。

(1) 要/会下雨。¹ [雨が降るだろう。]

(2) 天气突然变冷了, 很多人要/会感冒。

[急に寒くなってきたので、たくさんの人が風邪を引くだろう。]

(3) “告你睡地上要/会着凉, 你偏不听。” (CCL:王朔《永失我爱》)

[「床で寝ると風邪を引くと言ったでしょう、まったく人の言うことを聞かないのだから。」]

(1)(2)は、発話時点より未来に生起する事態を予測する例である。(3)は、一般的事態が生起する可能性に対し、話し手の判断を表す例であり、“着凉 (風邪を引く)” という事

態は、参照時となる“睡地上（床で寝る）”よりも未来に起こり得る事態である。以上の(1)-(3)における“要”“会”は、用法上大きな差異が見られない。しかし以下の(4)-(9)になると、お互いに置き換えることができなくなる。

(4) 夏季白蝴蝶多，冬季的雪就要/会大。(CCL: 迟子建《额尔古纳湖右岸》)

[夏に白い蝶々が多ければ、冬の降雪は多いだろう。]

(5) 天气突然变冷了，很多人要/会有感冒的症状。

[急に寒くなってきて、たくさんの人に風邪の症状が生じるだろう。]

(6) 竹子要/会开花。[竹は花が咲く。]

(7) 女孩子跑得当然没有男孩子快，眼看着要/会被追上。(CCL: 古龙《天涯明月刀》)

[女の子は当然男の子ほど走るのが速くないので、みるみる追いつかれそうになった。]

(8) a. “我是谁？你们迟早要/会知道的。”(CCL: 苏童《妻妾成群》)

b. “我是谁？你们迟早要/会知道。”

[「私はだれなのかが、お前たちは遅かれ早かれわかるだろう。]

(9) 对于我国的国有企业来说，经营得好，不搞股份制也能盈利；经营得不好，搞了股份制要/会盈利。(CCL: 《1994 报刊精选》) [我が国の国有企業について言うと、経営がうまくいっているのなら、株式制度を採用しなくても儲かるが、経営がうまくいっていないのなら、株式制度を採用することで利潤が上がるだろう。]

“要”“会”という形式に個別に焦点を当てた研究、あるいは逆に広く現代中国語の認識モダリティの意味を考察した研究はこれまで枚挙にいとまがない。しかし、(4)-(9)の例に見られる両者の意味機能の違いに焦点を絞った研究は比較的少数に留まる。また、それら少数の研究にしても、“要”“会”が表す認識モダリティの意味の違いを十分に解明しているとは言い難い。

例えば、刘月华等 1983、鲁晓琨 2004 は、“要”で表される事態成立の可能性は、“会”で表されるものに比べ、極めて高いと指摘する。しかし、その可能性の高低をはかる判定基準は明確ではない。加えて、(4)-(9)を見れば“要”と“会”の違いが単に事態成立の可能性の高低によるものではないと考えられる。

郑天刚 2002 は、“要”の注目する点が、ある状況が無から有になる変化過程であり、それに対し“会”は、ある状況が生起する確からしさに関心を寄せていると主張する。さらにそれを踏まえ、孙姝 2013 は、“要”が共起するのは、一般に動作や変化を伴う「動態性」の強い述語成分のみであり、静態動詞、形容詞のような述語成分とは共起が難しいと指摘する。また、彭利贞 2007、孙姝 2013 は“要”には“会”に比べ、「未来」という時制的な意味特徴が強く残されていると言う。可能性の高低という主張に比べれば、これらの論考は形式面に言及しており、その点で一定の説得力を有していると言えよう。しかし、上に挙げた(6)の“开花（花が咲く）”のように、変化を伴う「動態性」の強い動

詞であっても“要”の使用が認められない例もあり、また、“要”が許容されない「知っている」という動態性の低い(8)例も、(8a)のように、“的”を付加すれば“要”の使用が可能となる。“的”の付加によって述語部分に「動態性」がもたらされるとは考え難く、“要”がここに用いられる要因について、更なる検討が必要である。

本稿は、こうした先行研究の分析を踏まえた上で、(4)-(9)に見られる“要”と“会”の用法上の違いを検討し、“要”“会”が表す認識モダリティの意味機能という観点から、両形式のより本質的な差異を解明することを目的とする。

2. “要”と“会”が表す「起こり得る事態」の差異

2.1 事態の「動態性」から見た“要”と“会”の差異

孫姝 2013 は、“要”がある事態の成立の可能性に対し推量を表す際、その事態は動的な事態に限られると述べる。そして“会”にはこのような制約がないという。ここで言う動的な事態とは、一般に動作や変化を伴う動的で非均質性を持つ事象であり、反対に、静的な事態であれば、状態、性質などに関わる均質性・恒常性を持つ事象を表す。本稿のコーパスの用例に対する考察からも、“要”によって表される起こり得る事態には「動態性」がより強く要請される傾向が見られた。具体的に言うと、まず、“要”は静態動詞との共起が制限される。

(10) 你很会照顾人，你要/会是一个贤妻良母。(CCL: 电视访谈《鲁豫有约》)

[あなたは面倒見がいいから、きっと良妻賢母である。]

(11) 实际上受古代文化影响的人都要/会像他。(CCL: 对话《李敖对话录》)

[実際、古代文化の影響を受けた人はみな彼に似ているでしょう。]

(12) 别担心，到时候就要/会有房子的。(CCL: 陆文夫《人之窝》)

[心配しないで、いつか家を持つことができる。]

“是(である)、像(似ている)、有(<所有や存在を表す>ある・いる)”は現代中国語の典型的な静態動詞である。これらの動詞は、動作行為ではなく、事物の属性や存在、状態の持続などを表している。(10)-(12)を見れば、これらの動詞と“要”が共起できないということが分かる。下の(13)のように、「急に寒くなってきて、これから多くの人は風邪を引く」という意味を表す場合でも、(13a)のように“感冒(風邪を引く)”という変化を伴う動詞で述べたものと、(13b)のように“有感冒的症状(風邪の症状がある)”という所有を表す構造で述べたものとは異なる事態となる。前者が変化を伴う動的な事態、後者が状態の持続を表す静的な事態であり、“要”は、やはり(13b)の方には用いられない。

(13) a. 天气突然变冷了，很多人要/会【感冒】。(1節の例(2)を再掲)

[急に寒くなってきて、たくさんの人は風邪を引くだろう。]

b. 天气突然变冷了，很多人要/会【有感冒的症状】。(1節の例(5)を再掲)

- [急に寒くなってきて、たくさんの人に風邪の症状が生じるだろう。]
- また、“要”は動作や状態の持続を表す“着（～している）”とも共起が難しい。
- (14) 当投资者投资于这些证券时，他们遭受损失的可能性大小要/会存在着很大的差异。
 (CCL:《股市基本分析知识》)[投資者がこれらの証券に投資する際、彼らが受ける失の可能性の大小には大きな差があるだろう。]
- (15) 这个事情没有完结，全村人都要/会记着傻女。(CCL:张炜《秋天的愤怒》)
 [この事は終わってはいない。村民たちは皆この愚かな女のことを覚えているだろう。]

形容詞は一般に事物の状態や性質、すなわち時間的關係性が含まれず、変化を伴わない均質的な状況を表す。“要”はそうした形容詞とも共起が難しい。

- (16) 我知道相信这个故事要/会有点儿困难。(CCL:亦舒《紫薇愿》)
 [この物語を信じるのが多少難しいだろうというのはわかっている。]
- (17) 如果最后能拿冠军，他也要/会很高兴。(CCL:新华社 2003 年 11 月)
 [最終的に優勝できれば、彼も嬉しいだろう。]
- (18) 夏季白蝴蝶多，冬季的雪就要/会大。(1 節の例(4)を再掲)
 [夏に白い蝶々が多ければ、冬の降雪は多いだろう。]
- (19) 要是夜晚休息少了，那么人就要/会疲劳。(CCL:王昕《黄帝内经中的女人养生养颜经》)[夜寝不足になると、人は疲れを感じる。]

ただし、次の(20)-(22)のように、形容詞の前に否定辞の“不”がある場合、“要”の使用は可能になる。

- (20) 吃多了胃要不舒服的。(食べ過ぎると、胃の調子が悪くなるよ。)
- (21) 房子正处于高价，估计马上市场就要不好。(CCL:梁鸿《中国在梁庄》)
 [不動産はまだ高値だが、景気は間もなく低迷する見込みだ。]
- (22) 尹白见父亲这么谦逊，只怕她母亲要不高兴。(CCL:亦舒《七姐妹》)
 [尹白は父がこうも謙遜しているのを見て、母がおそらく不愉快になるだろうと思った。]

これは、“要”により表わされる事態の動態性が高いことの傍証と考えることができる。肯定の発話は、前もって何の情報も得ていない事態を認識しさえすれば、通常適切な発話として成立する。そのため談話の冒頭でも発話可能である。それに対して、否定の発話が適切に容認されるためには、否定に対応する肯定命題が話し手の側にあるという前提が必要条件となる。例えば、「雨が降っていない」と発話する場合、それと対応する肯定命題、「雨が降っている」という事態の想定を話し手が持っていることが前提である。つまり、否定の発話には、話し手の肯定事態への想定が付随していると考えられる。したがって、否定表現はそれ自体、前提としての肯定事態から否定事態への話し手の認識レベルにおいての変化の過程を含意している。その点で、ある状態や状況に対する単な

る叙述である肯定表現とは異なり、むしろ一種の動態性を伴う状態・状況の変化を表すものとして話し手に捉えられる。その意味において(20)-(22)の述語も状態変化と捉えられ、文の許容度が上がるのだと考えられる。

次に、(23)(24)の例を見てみよう。

(23) 明天的会议至少要/会来 20 人。

[明日の会議は少なくとも 20 人が来るだろう。]

(24) 明天的会议至多要/会来 20 人。

[明日の会議はせいぜい 20 人が来るだろう。]

(23)(24)は、それぞれ翌日会議に来る人数の下限・上限を予測する例である。“要”は下限値を示す“至少(少なくとも)”とは共起できるのに対し、上限値を示す“至多(せいぜい)”とは共起できない。このような差が生じるのは、“至少(少なくとも)”によって人数の最低値を推定する場合、話し手の予測が、会議の参加人数というよりも、むしろ「20 人」というスタートラインから増えていく人数の方に向かうためであろう。「少なくとも 20 人」は、20 人を超えた先の変化が許容され、尚且つ実際の参加人数がどれほど変化するのか話し手は予測・把握することができない。つまり一つの開放的な集合と捉えられる。それに対し最高値を推定する場合には、「20 人」は参加人数の上限であり、実際の参加者の数がそれを上回る可能性はない。実際には 5 人であったとしても、19 人であったとしても、話し手の予測の範囲から外れることはない。つまり「せいぜい 20 人」は、0 人から 20 人までの一つの閉鎖的な集合であり、「0 人から 20 人まで」という以上の変化を持たない一つの状態・状況として話し手に捉えられる。ここでの共起関係を見ても“要”によって表される事態が「動態性」、あるいは「動的な変化」という特徴を帯びていることが裏付けられる。

今までの分析をまとめるならば、“要”は通常「動態性」の高い述語成分と共起し、ある状況が生起・終結などの変化を起こす可能性に対し、判断を表すということである。

(25) 今晚要出事。(CCL:王朔《一般是火焰，一半是海水》)

[今夜は何か恐ろしいことが起こるだろう。]

(26) 邓某人不在政策要变。(CCL:《邓小平文选 3》)

[私、鄧がいなくなると、政策がおそらく変わるだろう。]

(27) 这书一出，有三个人要完蛋：赵父、赵子和我妻。(CCL:亦舒《香雪海》)

[この本が出版されると、趙家の親父や息子、吾妻といった三人がおしまいだ。]

両形式の差を「起こり得る事態」の性質という観点から見ると、“要”では「動態性」、特に「変化を伴う」述語が強く要請されるのに対し、“会”は動作や変化を伴う動的なものとも、状態、性質など静態的なものとも共起するということである。しかし、前述のように、述語の部分の「動態性」だけでは“要”“会”の差異を説明できない、さらにほかの点における両者の差異を見る必要があると思われる。

2.2 主語の「特定」・「不特定」から見た“要”と“会”の差異

前節では、おもに述語成分の面から、“要”と“会”の差異を見てきた。本節では主語の「特定」「不特定」という観点から、両者の差異を考察したい。

(28) 竹子^{*}要/会开花。[竹は花が咲く。] (1節の例(6)を再掲)

(29) 随着年岁的增长，一个人^{*}要/会慢慢成熟起来。(CCL:《老舍戏剧》)

[年をとるにつれて、人はゆっくと成熟していくのだろう。]

(30) 我也晓得我们当中一定有一个人^{*}要/会后悔。(CCL:亦舒《紫薇愿》)

[私たちの内、誰かがきつと後悔するという事は私だっわかっている。]

(28)は、裸の名詞“竹子(竹)”が主語になっている。この「竹」は、特定の一株の竹を指しているのではなく、「竹」という植物の総称を指していると理解される。“竹子会开花”は、すべての竹が「花が咲く可能性」を有しているという一般的・普遍的な事態に対する話し手の判断を表している。こうした事態の生起する可能性に対する判断を“要”が単独で表すことは難しい。反対に、一般性・普遍性を持たない事態、例えば、話し手が目の前の一株の竹が開花寸前である様子を見て、「この竹は間もなく花が咲くだろう」と発話する状況であれば、“这棵竹子要开花”のように“要”の使用は可能である。(29)も(28)と同様に、主語である“一个人”がある特定の人物を指さず、全ての人を指しており、“要”は用いられない。それに対し、(30)では、“一个人”の前に“我们当中(私たちの内)”という限定が加えられている。この場合、主語は我々の中の一人という特定の人であり、命題の事態も我々の中の一人に関わる個別のものとなる。ここでは“要”“会”がともに用いられる。

つまり、“要”を用いる場合、文の主語は特定のものでなければならないということである。“要”は、より特定の個別的事態が生起する可能性に対する話し手の予測判断のみを表し、“会”には、そのような制約がなく、主語が不特定である場合には、一般性を有する事態への判断を表すことも可能である。

述語成分において「動態性」「変化」、主語成分において「個別性」を求められる“要”と、そのような制約がない“会”の違いはどのような意味に起因しているのか、次節では「証拠性」の観点からその違いを考察したい。

3. 証拠性から見た“要”と“会”の差異

証拠性 (evidentiality) とは、情報・知識のソース、つまり、話し手が情報を得る方法 (例えば、知覚、引用、自らの推論・判断等) を反映する文法範疇を指す (Anderson 1986; Willett 1988; Aikhenvald 2004 等)。“要”と“会”は、認識モダリティ表現であり、証拠性にも関わる形式である。Aikhenvald 2004 は、情報ソースの分類において「推量」に関わる情報ソースを「推測 (inference)」と「想定 (assumption)」とに分けている。前者は可視的、あるいは実体的な証拠や結果に基づくものである一方、後者は直接観察される

状況、あるいは徴候から得られるものではなく、一般知識・経験に基づく論理的推論である。“要”と“会”は、この二つの情報ソースとの対応において異なる傾向を見せる。

(31) 天色不太好，一会儿要/会下雨。

[空模様があまりよくない、すぐに雨が降りそうだ。]

(32) 如果低气压接近，就要/会下雨。[低気圧が近づくと、雨が降る。]

(31)(32)はともに「雨が降る」という起こり得る事態に対し判断を下している。(31)は、推量判断の根拠となるのが、“天色不太好（空模様があまりよくない）”という話し手が視覚により直接観察した徴候である。それに対し、(32)は「低気圧が近づくと」という仮定が根拠となっている。これは条件を満たせば雨が降るという気象学の知識に基づく論理的推論であり、(31)では、“要”と“会”を置き換えられるが、(32)では“会”のみが用いられる。こうした“要”“会”の差は文脈上、推量判断の根拠が提示されていない場合にも表れる。例えば(33)では、“要”を用いると、発話の前提として、手元にある携帯電話の画面のひびを話し手が見ている状況などが想定されやすいが、“会”を用いると、話し手が「携帯が地面に落ちる」などの条件を想定した上で、「画面が割れる」という結論を導き出している状況が想像されやすい。

(33) a. 【看见屏幕上有很多裂痕（画面にひびが入ってしまった状態を見て）】

手机屏幕要碎。[携帯電話の画面が割れそうだ。]

b. 【手机如果掉到地上（携帯電話が地面に落ちる状況を想定すると）】

手机屏幕会碎。[携帯電話の画面が割れるだろう。]

本稿では、北京大学漢語言研究中心のCCLコーパスに収録された王朔の24作品のデータから“要”と“会”が認識モダリティを表す用例を抽出し、両者の直接経験に基づく用例（前後の文脈に視覚・聴覚・触覚など直接証拠と見なされる描写成分が含まれる）の比率を調査した。結果は以下の通りである。

表1 直接経験に基づく“要”“会”の用例数

	用例数	直接経験に基づく例
要	180 例	60 例 (33.33%)
会	699 例	22 例 (3.15%)

直接経験に基づく“要”の用例数は、用例全体の33.33%であり、“会”は3.15%にすぎない。これは有意の差と言えるだろう。

彭利貞 2007 は、“要”が持つ時制的意味合いは“会”よりも強く、“要”は認識モダリティを表すと同時に「未来相」のマーカールとしての機能も果たしていると指摘する。“要”が「未来相」のマーカールとして捉えられるのかどうかに関しては検討の余地があるが、重要なのは、“要”が事態の生起する可能性に対する判断を表すだけでなく、その発生が時間的に切迫していることを表す例が少なくないことである。

(34) a. 明天要/会下雨。[明日は雨が降る。]

b. 马上要/会下雨。[もうすぐ雨が降る。]

c. 【看见天越来越暗（空がだんだん暗くなってきたのを見て）】

要/会下雨。² [間もなく雨が降りそうだ。]

(35) 【看见桌子上的瓶子在摇晃（机の上に置いてある一本のビンがぐらぐらしているのを見て）】

桌子上的瓶子要/会倒！（机の上のビンが倒れそうだ。）

(34a)(34b)には、それぞれ時間を提示する成分“明天（明日）”“马上（もうすぐ）”が用いられており、この例では“要”と“会”を置き換えることができる。しかし、(34c)のように、空がだんだん暗くなってきたのを話し手が目の当たりにし、時間詞や副詞など時間を表す成分を一切使わずに「間もなく雨が降りそうだ」という状況では、“会下雨”はかなり不自然である。また、(35)のように、机の上のビンが今にも倒れそうだという状態に話し手が気づき、「危ない」「早く持って」と傍にいる人に注意喚起する場合、「ビンが倒れそうだ」には、“会”ではなく、“要”が使われる。さらに、(36)のように、事態の生起がかなり切迫していることを示す“眼看着（みるみるうちに）”などの表現が用いられる場合、“会”は単独では不自然である。

(36) 女孩子跑得当然没有男孩子快，眼看着要/会被追上。（1節の例(7)を再掲）

[女の子は当然男の子ほど走るのが速くないので、みるみる追いつかれそうになった。]

「起こり得る事態」がごく近い未来に発生する場合、“要”は単独で時間的切迫感を表出できるのに対し、“会”は、時間詞や副詞などを用いない限り、事態が迫っていることを表すことはできないということである。先の(34a)では、「明日は雨が降る」という事態の生起が時間的にごく近い未来ではなく、“要”を用いる場合、一見反例であるかのように見えるが、実は、(34a)では、“要”が用いられる動機として、「雨が降る」という事態が話し手にとって望ましくない、不如意の事態であることが関わっている。“要”は、“会”と比べ、不如意の事態への判断を表す傾向があり、また不如意の事態が差し迫っていることを表すことから切迫感が表出されるため、(34a)においても、“要”には時間的切迫感を表出する意味特徴が保たれている。この点については、5節で詳しく見ていくことにする。

先に証拠性の観点から“要”は直接経験から得られた何らかの徴候に基づく推測を表す傾向があり、“会”は直接経験に基づく推測を表すよりも、多くの場合、論理的推論や一般知識に基づく「想定」を表すと述べた。“会”により表される推論の根拠とその根拠に基づく判断はまだ話し手が想定する仮説の段階にある。それに対し、“要”により表される「起こり得る事態」の生起は実際に存在する状況・徴候が話し手によって感知されている。徴候とはある事態が起こりかけているという気配であり、より広く捉えたなら

ば、これから生起する事態の初期段階であると考えられる。徴候が現れた時点でこれから起り得る事態の一部は既に実現しており、徴候となる事態から次の起り得る事態の実現に移る時間的な余裕はそれほど残されていない。したがって、“会”の表す事態に比べ、“要”の表す事態は、一定の「実在性」を帯びているため、“要”の表す事態の生起が発話時点、あるいは参照時点に、より接近しているであろう。

これまでの分析をまとめると以下のようなになる。“要”は直接経験から感知された可視的・実体的な徴候に基づき、ある事態の生起を予測し、同時にその事態の生起が差し迫っていることを含意する。それに対し、“会”は直接経験に基づく推量判断を表すこともあるが、多くの場合、論理的推論に基づき、事態の生起・存在の可能性に対する話し手の予測を表しており、“会”自体は事態生起の時間的切迫性を表さない。2節で論じた述語成分において「動態性」「変化」、主語成分において「個別性」を求められる“要”と、そのような制約がない“会”の違いも、まさに両者のこうした証拠性の違いに原因があると考えられるだろう。つまり、“要”は、発生してくる徴候の感知に基づいているため、普通話し手の身近にある変化を伴う個別の事態への判断を表すことが想定されやすく、“会”は論理的推論に基づいているため、眼前にある個別の間もなく変化が起り得る事態への感知ではなくても、まだ話し手の仮想世界に留まっている一般性を有する事態や仮説への判断も表すことができ、ゆえに“会”には事態の「動態性」や「変化」、また主語の「個別性」が特に求められないのであろう。そして、“要”“会”のこのような意味特徴と機能の違いが、さらに助詞“了”“的”との共起関係にも反映されることになる。

4. “了”“的”との共起関係から見た“要”と“会”の差異

先行研究の中には、“要”“会”と“的”“了”の共起関係について論じるものも多く存在する。“要”は文末助詞の“了”と共起できるのに対し、“会”は共起することができない。また、“会”に関しては、しばしば“的”との共起が指摘される(郑天刚 2002、彭利贞 2007、孙姝 2013 等)。ただし、その共起関係の内実やその背後にある動機づけに対する十分な分析は管見の限り殆ど見られない。“了”の意味機能については、従来「変化が起こること」あるいは、「新しい状況の出現」を表すと記述されることが一般的であり、また、“的”の意味機能については、郑天刚 2002 は、「認定の語気を強める」と分析する。“了”“的”いずれも、その意味機能に関しては様々な見解があるが、ここでは“要”“会”と共起する“了”“的”という点に絞り、まず認識モダリティと共起する“了”“的”の意味機能を検討した上で、その共起関係の違いから、“要”“会”両者が表す認識モダリティの差異を考察したい。

4.1 “要”“会”と“了”の共起状況

文末助詞の“了”について、呂叔湘 1980 は、ある事態に変化が起こったことを表すとし、朱德熙 1982 は、新しい状況の出現を表すと記述する。また、木村 2006 は、文末助詞の“了 (LEsp)”は、何らかの「変化」が参照時において「既に実現済み」であることを表すと分析する。「新しい状況の出現」であれ、「変化の実現済み」であれ、いずれも已然の事象や事態である。“会”と“要”は認識モダリティ表現であり、両者が表す「起こり得る事態」は、無論「未実現の事態」である。そのため「已然の事態」を表す“了”と共起し難いのは当然であると理解できる。しかし、“会”が“了”と共起できないのに対し、“要”は“了”としばしば共起する。

(37) 我们中国，就要[/]会亡在你们这些人手里了。(CCL:王朔《千万别把我当人》)

[我々中国は間もなくお前たちの手で滅される。]

(38) 你放开我吧，人家要[/]会赶不上车了。(CCL:王朔《浮出海面》)

[私を放してください、バスに間に合わなくなるから。]

小野 2010 は、「～すぎる」という「過分」の意味を表す程度副詞“太”と文末助詞“了”との共起関係を考察する論考の中で、“太”が“了”と共起するメカニズムに関して、“了”の「実現済みの変化」という意味が話し手の心的レベルにおいて作用していると述べている。具体的に言うと、“太”の表す「行き過ぎ」は、話し手が直接経験による検証を経て、ある属性の程度に対し適切な程度の範囲となる「想定範囲」を超えているという意味であり、この「想定範囲」から「行き過ぎ」の領域に移ったことが「変化」として認められ、心的レベルにおける“了”の共起を可能にしているという分析である。本稿が問題とする“要”と“了”の共起も、このような心的レベルにおける「変化が実現した」という認定を表すものだと考えられる。

2 節で分析したように、そもそも“要”の表す「起こり得る事態」は「変化」という特徴が強く要請される。また、“要”は直接経験から得られた徴候に基づき、差し迫った事態の変化への判断を表す傾向があり、事態の生起・変化の一部は、既に徴候として実現したものと同様に捉えられる。話し手にとっては、間もなく起こる事態の変化がほぼ実現するという状況である。そのため、事態が話し手の心的レベルにおいてほぼ実現したかのよう捉えられ、“要”が“了”と共起するのである。

それに対し、上の(37)のように、たとえ“会”の前に動作行為や事態が間もなく行なわれることを表す副詞“就”があっても、“会”を用いた述語に“了”を付け加えることはできない。前節で、“会”は認識モダリティ表現として論理的推論や一般知識に基づく「想定」を表す傾向があると指摘した。直接経験を根拠にしても、一般的知識などの間接経験を根拠にしても、“会”が着目するのは、事態の生起・変化が間もなく実現するというのではなく、推論の根拠と起こり得る事態との間に存在する論理的関係に基づく判断である。“会”が“了”と共起できないのは、“会”の表すモダリティが「非現実性」という認識モダリティの意味的特徴を強く持っているためであると考えられる。

ただ、このメカニズムは話し手自身が実際に経験・体験して知り得た現実世界に属する属性や性質について認定したレベルを表す“太～了”と全く同じではなく、“要”が表す事態の生起や変化はあくまでも未実現の事態であり、“太”と共起する場合より、“要”と共起する“了”は、さらに機能化し、未現実の事態を話し手の心的レベルにおいて既に実現したかのように捉えようとする話し手の心理的な処理を反映しているものであると考えられる。

4.2 “要”“会”と“的”の共起状況

従来の研究では、“会”がしばしば“的”と共起するものとして取り上げられている。しかし実際には、“会”だけでなく、“要”もまた認識モダリティ表現として“的”と共起する。

(39) a. 明天要/会下雨。 b. 明天要/会下雨的。[明日は雨が降るだろう。]

(39b)に用いられる“的”の有無は、文の成立に影響しない。このような“的”は、“他昨天来的(彼は昨日来たのです)”、“这个包是在上海买的(この鞆は上海で買ったのです)”などの省略不可能な“的”とは異なり、よりモーダルな意味を表すと考えられる。(39a)と(39b)はいずれも成立するが、“的”を伴う(39b)と“的”を伴わない(39a)は、若干ニュアンスが異なる。また、CCLコーパスで、“一定会\$5,4”、“一定会\$5 的,”を検索項目として、それぞれの用例を調査したところ、“的”を伴わない用例が1430例検出されたのに対し、“的”のある用例は296例であった。つまり、量的に考えて、“的”と共起する例は少数すなわち有標であり、“的”には何らかの「推量判断」と異なるモダリティの意味機能が備わっていると考えられる。

“会”と共起する“的”の意味機能について、郑天刚 2002 は、「認定の語気を強める」と指摘するものの、客観的な分析とは言い難く、「認定」が具体的にどのようなことを指しているのかについて説明をしていない。

小野 2010 は、程度副詞「挺」(とても/まずまず)と“的”の共起を分析する中で、“会”と“的”の共起との共通点にも触れ、共起のメカニズムとして“的”の有する意味的類化を行う「モノ化」機能⁵との結びつきを挙げている。具体的に言うと、“挺”は話し手個人の基準に基づく程度認定を表し、且つその程度は一定ではなく幅を持っている。要するに“挺”を用いる程度表現は、個々の事例としては「多様な程度」を有している。そういった「多様な程度を持つ」属性を一括して“挺～”というグループに入れておこうとする心的な働きが、“的”の共起を要請し、“的”の有する「類化」機能が、話し手の心的レベルにおいて「属性の実存化」を標記する機能へと派生すると分析する。また、“挺”が表す「程度認定」と“会”が表す「起こり得るべきことの予測」は、ともに話し手の独自の判断を表出するという点で共通するため、“会”が表す「予測」は「未実現の事態」であるが、それを話し手が心的レベルにおいて、あたかも実存しているかのよ

うに捉えようとする「(擬似) 実体化」の作用が、“的”との共起を要請するのではないかと指摘しているが、“会”と“的”の共起のメカニズムについてはそれ以上の詳細な検討を行っていない。

“要”“会”はいずれも“的”と共起し、且つ“的”の有無は文の成立に影響を与えない。しかし、次の(40)(41)のように、“要”を用いる文では“的”を除くと、文の座りが悪くなることがある。“的”の省略が許される(39)との違いは述語成分の動態性にある。(39)の動態性が強い動詞文“下雨(雨が降る)”に対し、(40)の“知道(知っている)」、(41)の“伤心(心を痛める)”は状態や感情を表す、より静態的な動詞である。“要”は普通「変化」を伴う動的な事態にしか用いられず、動態性の低い述語成分とは共起し難いが、“的”の付加により“要”の使用が可能となっている。

(40) a. “我是谁？你们迟早要/会知道的。”(1節の例(8)を再掲)

b. “我是谁？你们迟早*要/会知道。”

[「私はだれなのかが、お前たちは遅かれ早かれわかるだろう。」]

(41) a. 我说出来你听了要/会伤心的。(CCL:《残雪自选集》)

b. 我说出来你听了*要/会伤心。

[私が言ったら、お前はそれを聞くと傷つくだろう。]

また、“要”が“的”と共起する文法的環境の一つの特徴としては、“要～的”はしばしば(41)のような条件文の帰結節に出ることである。筆者がCCLで“要\$10 的”を検索項目として調査したところ、認識モダリティを表す709例の中では、述語成分が動態的なものであれ、静態的な状態や感情などであれ、“要\$10 的”が条件文の帰結節に用いられる例は536例であり、用例総数の75.6%を占める。

前述のように、“要”は、「非現実性」の高い論理的推論を表す“会”と違って、しばしば直接経験に基づく一定の「実在性」の特徴が付与されている事態の生起に対する判断を表す。しかし、(41)のように、“要”は、“的”と共起することにより、推論の論理的根拠が顕在化される仮定を表す条件文の帰結節の中で、つまり、普通“会”を用いる環境の中でも現れ、“会”と同じような認識モダリティを表出することができるのだと考えられる。これに照らして、“的”がもし前述のように、ある事態の発生や状態の存在を話し手の心的レベルにおいて「類化」あるいは「実存化」する機能を果たしていると考えたならば、“会”（“要”）が“的”と共起するメカニズムに対して以下のような説明が可能であろう。“会”（“要”）は何等かの根拠に基づき、ある事態の発生に対する話し手の予測判断を表すが、その推論判断を生み出す方法や根拠は様々であるため、“会”と共起する“的”は、話し手の心的レベルで各種の根拠に基づく“会（要）X”という判断を統括し、一つの“会（要）X”の「類」に入れておくという主観的な認定を行っていると考えられる。例えば、話し手の認識には、「空が暗くなってきたから、雨が降る」「梅雨に入ったから、雨が降る」というような多様な根拠に基づく「雨が降る」という事態への

判断が存在しており、“的”との共起によって、それらを一括して“会下雨”のグループに入れ、各種の条件から生み出される未実現の事態を、話し手の心的レベルにおいて類化し、擬似的にリアルなものとして捉えているのである。

しかし、(39)-(41)のように、“会”は“的”の有無にかかわらず、それ自体が話し手の主観的な認定を表すという認識モダリティの機能を獲得しているのに対し、“要”は、「動態性」「個別性」および「実在性」の低い事態への判断を表わそうとする場合、単独で認識モダリティを表す機能が弱く、それを表出するには、「類化」と「実体化」機能を有する“的”の補助が必要となる。“要”は、認識モダリティを表す以外に、「意志」「願望」や「義務」などに関わるモダリティも表す。特に主語が人間である場合、“要”が表すモダリティの意味には複数の解釈が可能である。“的”の付加は、“要”の意味を、事態生起の可能性に関わる認識モダリティの意味に限定する。例えば、(40)のように主語が人称代名詞である場合、“的”がなければ、“你们要知道”は「お前たちは知る必要がある」という「義務モダリティ (deontic modality)」の意味にしか解釈できないが、“的”の補助により「知ることになるだろう」という認識モダリティの解釈が可能となる。

“要”“会”と共起する“的”は未実現の事態を話し手の心的レベルにおいて類化し、実体化するという機能を持つと分析した。同時に“的”の付加によって話し手自身の判断であるという主観性も顕在化される。従って、(39)では、“的”を伴わない(39a)と比べ、“的”を伴う(39b)は、「傘を持って行け」「山登りをやめろ」というような、聞き手に対して何らかの「注意喚起」を促したり、「忠告」を与えたりする「配慮、働きかけ」が含意される。(43)と(44)のように、“的”を伴う文の後ろには、「安心して良い」「やはり彼に会いに行かない方が良い」といった「聞き手への働きかけ」の内容が後続している例が、コーパスの実例にもよく見られる。

(42) “明天会下雨的，你要带伞/别去爬山。”

[「明日雨が降るよ、傘を持って行け/登山をやめろ。」]

(43) “大公司嘛，一定会言而有信的，这点你可以放心。” (CCL: 李可《杜拉拉升职记》)

[「大手企業だから、言うことにきっと信用があるから、安心していいよ。」]

(44) “你一定会投降的，你还是不要去找他吧！” (CCL: 岑凯伦《合家欢》)

[「貴方は、きっと彼に投降するから、やはり彼に会いに行かないほうが良い。」]

また、(45)のように、“的”を伴う文は、話し手が事態の生起に対する自身の判断に強い信念を持って、聞き手の判断や認識を是正しようとする場合にも、しばしば用いられる。

(45) 他一定会成为画家的，他要向心胸狭窄的家族证明，正确的是他，而不是他们。

(CCL: 翻译作品《从乞丐到元首》) [彼はきっと画家になる。彼は、正しいのは彼らではなく、自分であることを心の狭い家族たちに証明して見せる。]

さらに、“的”を伴う文は、いきなり新しい情報として質問に答える場合に用いる

ことが難しいとされ、例えば(46)のように、「明日の天気はどうか」という質問に対して答える場合は、“的”のない(46a)の方が適切である。

(46) “明天天气怎么样？”—— a. “明天要/会下雨。” b. “明天要/会下雨的。”

〔「明日の天気はどうか。」—「明日は雨が降る。」〕

つまり、“的”を伴う推量判断文は、必ず聞き手への何らかの配慮といった前提の存在（例えば、前述のような、聞き手がある事態の生起を信じていない、注意していないという想定など）を必要とするのである。先に述べた“一定会\$5 的，”の実例 296 例の内、前後の文脈において「聞き手への働きかけ」を表す部分が共起する用例は 95 例で、総数の 32.09%を占める。それに対し、“的”のない“一定会\$5，”の前後の文脈において「聞き手への働きかけ」の内容が含まれる用例は 99 例で、1430 例の 6.92%にしか及ばない。また、“一定会\$5 的，”の 296 例中、79 例には“我坚信（私は確信している）”、“我保证（私は保証します）”などのような話し手の個人的信念を示す成分が現れる。要するに、“会”“要”と共起する“的”は、現実世界に属する事物や事態に対する言及である“挺”と共起する“的”より、さらに機能化し、ある未実現の事態がリアルなものとして存在しているという話し手の心理上の認定分類を表すということである。従って、“的”を用いる文では話し手自身の判断に対する確信が強く表出され、そこから「聞き手の注意を喚起する」「聞き手の判断を是正する」といった意味が生まれるのだろう。

これまでの分析をまとめてみると、“要”は、認識モダリティの意味を表す際に、単独では不安定だが、しばしば文末助詞の“了”と共起し、「変化間もなく実現する」ことを表し、時に話し手の心的レベルにおいての「実体化」機能を持つ“的”の補助も必要となり、話し手の主観的認定を顕在化させる。それに対し、“会”は、“了”とは共起できず、“的”の補助がなくても、“会”の認識モダリティの表出には影響がない。これは、“会”自体が認識モダリティを表す機能を獲得しているということであり、“会”が表す事態発生への判断には「非現実性」という認識モダリティが持つ意味的特徴が強く現れるということの顕れである。

5. “要”と“会”が表す「感情的色彩」の差異

鲁晓琨 2004、孙姝 2013 は、“要”には不如意の事態への推量を表す傾向があると指摘している。例えば、(47)(48)はそうした例である。(47)の「風邪を引く」という不如意の事態への判断を表す場合には、“要”を用いることができるが、(48)のような「儲けになる」という話し手にとって有利な事態の場合、“要”の使用が不自然になる。

(47) “到车间里快换身衣服，这样要/会着凉的。”（CCL:周而复《上海的早晨》）

〔「職場に着くと早く着替えて、このままじゃ風邪を引くよ。」〕

(48) 对于我国的国有企业来说，经营得好，不搞股份制也能盈利；经营得不好，搞了股份制要/会盈利。（1 節の例(9)を再掲）〔我が国の国有企業にとって、経営がうまく

いっているなら、株制度を採用しなくても、儲かるが、経営がうまくいっていないなら、株制度を採用すると、儲けになる。]

上述の王朔の小説 24 作品のデータから“要”“会”の認識モダリティの用例の内、不如意な事態(前後の文脈も含め)を表す比率を調査すると、結果は表 2 のようになった。

表 2 不如意な事態を表す用例数

	用例数	不如意な事態を表す用例数
要	180 例	128 例 (71.11%)
会	699 例	238 例 (34.05%)

“要”が不如意の事態に用いられるのは、全体の 71.11%であり、“会”が不如意の事態に用いられるのは、34.05%である。さらに、プラス義・マイナス義を表すいくつかの述語動詞を選び、CCL で各語が“要”“会”と共起する用例数を調査すると、表 3 のように、こちらの共起関係にも偏りが見られた。

表 3 プラス義やマイナス義を表す意味成分でのデータ数

	～成功 (成功する)	～変好 (よくなる)	～失敗 (失敗する)	～倒霉 (不運な目に遭う)	～完蛋 (おしまいになる)	～挨 (ひどい目に遭う、つらいことを辛抱する)
要	12 例	2 例	257 例	21 例	98 例	388 例
会	81 例	34 例	25 例	10 例	44 例	167 例

以上の調査から、確かに“要”は“会”に比べ、不如意の事態に用いられる傾向が高いと言える。問題は、なぜ“要”にこのような傾向があるのかということである。先行研究は、事実の指摘に留まっており、妥当な説明を与えてはいない。

認識モダリティの意味機能という観点から“要”のこの傾向について分析を行なう。そのためにまず、不如意の事態が発生する際の認識過程を考えてみたい。人は、普通、良い事態の発生・実現を目指して様々な作業や努力をする。良い結果の実現は我々の予想や計画の中に既に存在しており、我々は最初からそれを認識・把握できる。それに対し、不如意の事態を目指して、作業や努力をすることは普通考えられない。そのため、不如意の事態は、事態が悪い方向に移る寸前になって初めて気が付くものである。つまり前もって予測し難い事態であり、多くの場合には不如意の事態の発生に気付いた瞬間、既に手遅れになってしまい、事態に対して何ら改善も調整もできなくなることさえある。すなわち、不如意の事態発生時の認識過程における重要な特徴は、事態の認識から事態の実現まで時間的に切迫していることである。これが“要”が用いられる動機である。3 節で分析したように、“要”は直接経験から感知された可視的・実体的な徴候に基づき、ある事態が間もなく発生することを表す。つまり“要”で表す起こり得る事態に対する話

し手の判断過程は不如意な事態への認識過程と合致している。言い換えれば“要”が表す起こり得る事態は不如意なことを含意しているとも考えられる。また、“要”は不如意な事態の生起が差し迫っていることを表すことにより、一種の「緊迫感」や「危機感」を表出する。そしてそれによって「警告」「威嚇」といった語用論的機能も果たしている。

(49) “别怪我没有警告你——你要输的。”(CCL:《读者合订本》)

〔「私が警告しなかったなんて言わないで——お前は負けるのだ。〕

(50) “你注定要完蛋，年轻人，你连祈祷都来不及了。”(CCL:翻译作品《龙枪传承》)〔「お前は失敗する運命だ、若者よ、お前は祈ってももう遅い。〕

“会”も統語上(49)(50)に用いることが可能である。しかし、“会”の場合、単に起こり得る事態への予測に留まり、「負ける」、「祈ってももう遅い」という事態が差し迫っている緊迫感や危機感は一切表さず、「警告」、「威嚇」を表す語用論的機能を果たすことはない。

6. おわりに

本稿は、“要”と“会”が表す認識モダリティの違いを解明することを試みた。

結論を要約すると、“要”は直接経験から得られた徴候に基づき、ある事態、特に変化を伴う個別の事態が間もなく発生することへの判断を表し、事態・変化の実現に関心を寄せるのに対し、“会”は直接経験に基づく推量判断を表すこともできるが、多くの場合、論理的な推論に基づき、事態の生起・存在の可能性に対する話し手の予測を表し、推論の根拠と起こり得る事態との間にある論理的関係に着目している。そして“会”自体は事態生起の時間的切迫性を表さない。また、“要”は、単独で認識モダリティを表す場合、不安定になり、しばしば文末助詞の“了”と共起し、時には「実体化」機能を有する“的”の補助も必要となる。それに対し“会”は、文末助詞の“了”と共起できず、“的”の補助がなくても、認識モダリティを表す機能を有している。“会”が表す認識モダリティは「非現実性」の意味的特徴を強く志向する。さらに、“要”は不如意の事態への判断を表す傾向があり、また不如意の事態が差し迫っていることを表すことから、「緊迫感」、「危機感」が表出され、「警告」、「威嚇」を表すといった語用論的な機能も併せ持つ。

註

¹ 本稿に用いる出典付きの用例は、北京大学漢語言言研究中心の CCL コーパスから採取したものであり、本稿では、一部の用例に対して同じ文脈において互換可能な語を同時に提示している。もとの例文で用いられている語はゴシック体で記す。また、出典のない用例は筆者の作例であり、作例や文の自然さの判断は複数の中国語母語話者のインフォーマント・チェックを受けている。

² 「#」は、語用論的に不自然であることを示している。

- ³ 中国語には動詞接辞と文末助詞という二つの種類の“了”があるが、本稿における“了”は、すべて文末助詞の“了”を表す。
- ⁴ 「\$5」は語と語の間に最大5文字の任意の文字が入る検索方法を意味する。
- ⁵ 小野 2001 は、“的”の「モノ化（事物化・指称化）」機能について、“X 的”は、文法的には X の名詞化を担い、意味的には類化を行い、それぞれが個別差を有する具体的な一群の所属（人）物を包括するグループ名として機能すると述べている。

参考文献

- 刘月华等 1983 《实用现代汉语语法》，北京：外语教学与研究出版社。
- 鲁晓琨 2004 《现代汉语基本助动词语义研究》，北京：中国社会科学出版社。
- 吕叔湘 1980 《现代汉语八百词》，北京：商务印书馆。
- 彭利贞 2007 《现代汉语情态研究》，北京：中国社会科学出版社。
- 孙 姝 2013 《表示认识情态的“要、会”的句法语义分析》，北京大学硕士论文。
- 郑天刚 2002 “用于推测时‘会’与‘要’的差异”，《似同实异——汉语近义表达方式的认知语用分析》：127-150 页，北京：中国社会科学出版社。
- 朱德熙 1982 《语法讲义》，北京：商务印书馆。
- 小野秀樹 2001 “的”の「モノ化」機能—「照応」と“是…的”文をめぐる一，『現代中国語研究』第3期：146-158 頁。
- 小野秀樹 2010 「“挺～的”と“太～了”の意味機能」，『漢語と漢語教学研究』創刊号：17-31 頁，東京：東方書店。
- 木村英樹 2006 「持続」・「完了」の視点を超えて—北京官話における「実存相」の提案—，『日本語文法』6 卷 2 号：45-61 頁，日本語文法学会。
- Anderson, L. B. 1986 Evidentials Paths of Change and Mental Maps: Typologically Regular symmetries. *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, ed. by W. L. Chafe and J. Nichols, pp. 273-312. Norwood: Ablex.
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004 *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Willett, T. 1988 A Crosslinguistic Survey of the Grammaticization of Evidentiality [J]. *Studies in Language* 12, pp.51-97.

用例出典

《北京大学中国语言研究中心 CCL 语料库》(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)

